

「漂民対話」の朝鮮語 — その虚構的側面 —

岸田文隆

0. 序

本論文は、江戸時代、薩摩苗代川におこなわれた朝鮮語学書のひとつ、「漂民対話」の朝鮮語の性格につき、特に、その成立経緯、対訳日本語との関係および日本語の干渉の観点から、検討・考察を加えたものである。

一体、語学テキストは、その実用的性格のゆえに、さもありげな現実的対話をかかげるのが常であるが、よくよく検討してみると、実際の対話実態とはかけ離れた内容となっている場合がある。ここにとりあげる「漂民対話」は、従来指摘されてきたとおり、薩摩の伝語官（通訳）と当地に漂着した朝鮮全羅道出身の漂流民との対話を題材とした語学テキストとみなされうるが、この資料にも、そのような対話の想定や標榜するところとはくいちがう内容、特徴がみとめられることを述べようと思う。

本書に関する研究は、近年、語学的な関心にとどまらず、歴史学（近世民衆史）の立場からのアプローチもさかんに試みられるようになってきた。それらの研究は、おおむね、「漂民対話」を「史料」としてとりあつかおうとする、つまり「漂民対話」の内容を何らかの歴史的事実の記録、乃至は反映とみなそうとする傾向を帯びているが、その最も端的な例として、「漂民対話」苗代川自生説、すなわち、「漂民対話」は薩摩領内に漂着した実際の漂流民から得た生の情報を書きとめ、それをそのままテキストとしたもので、薩摩苗代川において自生的に成立したものであるとする見解がある¹⁾。この立場の研究の中には、叙上のごとき本書の対話の想定に関しても、すなおにそれを実在のものとしてうけとろうとしたものが見うけられる²⁾。

確かに、本書には、

1) 鶴園(1995)p.110、鶴園・他(1997)pp.182-184など。

2) 鶴園(1995)pp.110-111、鶴園・他(1997)p.181など。また、「漂民対話」の朝鮮語の性格を論じた김영신(1981)、유동석(1998)も、本書の朝鮮語に本来の朝鮮語らしからぬ不自然な用法、日本語の干渉をこうむったと思われる用法が観察されることについての言及はあるものの、やはり基本的には、本書の朝鮮語が現実対話を反映しているとの前提から出発した研究である。유동석(1998)p.243などを参照。

①漂流民に対する事情聴取の際に実際に作成されたいわゆる「論単」³⁾や「漂流民口書」の類と著しく類似した内容を有している。

②船に関する専門用語や動植物名などに他の既製の朝鮮語学書類には見られない独自の語彙、漂流民から直接採取したと思われる語彙を収録している。

など、現実の漂着事件に取材した側面がみとめられる。したがって、本書の対話内容が薩摩における伝語官と朝鮮人漂流民との実際の対話のある程度反映していることは、否定できない。

しかしながら、後述するところのように、「漂流民対話」にあらわれる漂流民と伝語官の対話の内容を仔細に観察すると、(従来、現実対話を反映したものとみなされていたものの中にも)現実の対話としては不自然な部分、はなはだしくは意味の通らない部分も散見されるのである。本書の資料的性格を全体として見極めていくためには、そのような本書の「作り話」の部分、虚構的側面に対する究明もなされねばならないであろう。

本論文は、このような立場から、

①まずは本書の成立にかかわる諸問題をいま一度点検しなおし、本書は、必ずしも、薩摩領内に漂着した漂流民から得た情報のみに基づくもの、苗代川独自のものではなく、対馬由来の朝鮮語学書類(「交隣須知」「惜陰談」「講話」「和韓問答」)を引用・参照し、それを改変した形跡がみとめられることを指摘、

②さらに本書の朝鮮語および対訳日本語に対して検討を加え、本書の朝鮮語には、朝鮮語母語話者である漂流民の言語をそのまま書き取ったのではなく、対訳日本語を翻訳したと思われる部分が見られること、日本語母語話者によって作り出された「不自然な」朝鮮語、日本語の干渉をこうむった用法・文例と思われるものが多く発見されることを明らかにしたものである。

3)薩摩領内に朝鮮人が漂着した場合、まず漂着地の役人が「論単」と呼ばれる文書を提示したという。「論単」には、出航地・出航期日・漂流期日・乗員数・乗員の姓名・年齢・宗教および積載物を明らかにするよう求めたり、毒薬を持ちこんではならないことを通知する文言が漢文で書かれているが、その内容が「漂流民対話」上巻の問答内容に酷似している。徳永(1994)p.27および徳永(2001)p.91には、次のような「論単」実物の文面が掲載されている。

「論単

客船在何国欲前往何処本国/ 某月某日開港何日於洋中遇/ 此難直不能行無奈漂到此国/
載自船主至商客水梢等通船/ 人数幾人各年歳姓名所恭拜/ 仏神或装載貨物及軍器等記/
上書帖矣南蛮入廟者并班猫/ 信石諸毒藥之類素来我国大/ 禁也如有此情者罪可逮其身/
莫敢犯国法所報無空言速々/ 示来/ 人名册依常例写来/ 年号月日/ 薩摩国/
長島頭目/ 船主/ 収覽」

1. 資料

本論文においてあつかう「漂民対話」の写本は、現在その存在が確認されている次の3種である⁴⁾。いずれも、薩摩苗代川にその出自を持つ。

- 1) 京都大学文学部所蔵本[No. Philology/2D/37a]、2巻2冊（上巻・下巻）、弘化2年（1845）朴元良（泰元）書写。1917年頃新村出が苗代川の朝鮮系帰化人の子孫から購入したもので、苗代川に出自を持つ。（以下[漂民/京]）
- 2) 鹿児島沈寿官家所蔵本（鹿児島県立図書館に電子複写本がある）、2巻2冊＋破本（上巻・下巻・中巻の一部）、嘉永7年（1854）朴寿悦書写。（以下[漂民/沈]）
- 3) ロシア東方学研究所サンクトペテルブルグ支所アストン文庫所蔵本[No. C 67]、2巻2冊（中巻・下巻）、嘉永7年（1854）姜蘇淳書写。ウィリアム・ジョージ・アストン(William G. Aston)の旧蔵本であるが、1877年苗代川を訪れたアーネスト・メイソン・サトウ(Ernest M. Satow)が目撃したものと同一の写本と見られる。（以下[漂民/ア]）

なお、比較参考資料として、後代に（おそらくは朝鮮語母語話者の手によって）書き改められた、次のバージョンを用いる。

- 4) ロシア東方学研究所サンクトペテルブルグ支所アストン文庫所蔵『朝鮮語会話書（仮題）』[No. C5]に収録されたもの、1巻（中巻）、1885年頃アストンの朝鮮語教師が3)の[漂民/ア]の中巻部分を当時の現代語に書き改めたものと見られる。（以下[漂民/ア会話]）

本書上中下巻⁵⁾の内容は、それぞれ次の通りである。

上巻：漂着から長崎護送を迎える日までの取り調べ

中巻：対馬倭館や動植物、食べ物、風俗など、朝鮮の文物・事情についての問答

下巻：漂着船の修理をめぐるやりとり、日本と朝鮮の船についての問答

4) 以下の諸写本の詳細については、李康民(1990)(1996)、鶴園(1995)、鶴園・他(1997)、岸田(1997)(1998a)(1998b)(2000)を参照のこと。

5) ここにいう「上中下巻」とは、李康民(1990)の命名にしたがったものであり、便宜上のものである。「漂民対話」の各巻がもともとどのような順番であったのかについては、まだ解明されていない。

2. 「漂民対話」の成立をめぐる

本書の朝鮮語の性格についての考察をおこなうに先立ち、まず、本書の成立に関わる問題点を整理・検討しておきたい。本書には序跋共になく、いかなる経緯で成立したか、推察し得る資料は無きに等しいが、本書の内容の検討、薩摩苗代川におこなわれたその他の朝鮮語学書、特に対馬由来の朝鮮語学書類との比較対照を通じて、この問題への接近を試みたいと思う。

2.1. 成立地、作成者

本書には、その成立地、作成者を明記したものが見当たらないが、本書において想定されている対話の場面、登場人物などから、推測をめぐるしてみよう。

まず、本書において想定されている対話の場面について検討する。本書の対話の場面は、本書上巻の次の部分から、長崎と陸続きの場所、つまり（対馬ではなく）九州であることが明らかである。

[1] [漂民/京:上:50a:3]●⁶⁾요스이쳐로 바람이 사오나오면 언제 發船되느지
아지 못시오매 長崎道까지는 못길로 가고 비는 뒤흐로 보내여 주옵시게
엿줍서 願請하느대로 되게 周旋하여 주옵쇼

此程ノヤウニ風ガアシウゴサレバ、イツ出船ニナラフモシレマセヌ故、長崎道マデハ陸地ヨリユキ、船ハアトヨリヲ送下サルヤウニヲ、セ上ラレテ、
ネガヒドヲリニナルヤウニ ヲセワナサレ下サレマセ

九州のどの地方が対話の場面であるのか、明確な地名などはあらわれないが、本書が薩摩苗代川においておこなわれていたことなどを考慮すれば、薩摩領内が対話の場面となっているものと考えるのが妥当であろう。

さらに、本書中巻の次の部分から、本書の対話の場面は、伝語官（朝鮮通事）居住の村から20里（約80キロメートル）ほど隔たったところであることがわかる。

[2] [漂民/ア:中:1a:1-2b:5]○以前 못보왔네 자네들은 意外에 漂流하옵다가
죽기 苦生을 하엿습는가 시브외 나도 伝語官이온디 今船(番)은 同官네
問情時任의 當하여 왓스오니 내 올 차례 아니로되 伝語官 所任의 이서
朝鮮사람이 漂泊을 든나마 아니보기는 人事之道의 맞당치 아니하매 내

6) 以下、「漂民対話」からの引用文中において、○は伝語官のせりふ、●は漂流民のせりふであることを示す。

사던 ㅁ을의셔 二百里만 隔호여 잇스오나 暫間 보고져 호여 부러 왔네

ハジメテアヒマシタ コナタ、チハ ゾンジヨラズ 漂流イタシテ サゾ
ナンギヲ サレタデゴザラフ 拙者モ 伝語官デゴザル処 此度ハ 同役ナ
ド 口伺ヒノ役目ニアツテ マイツタニヨリ 拙者ノクル順デハナケレ
トモ 伝語官ツトメニアツテ 朝鮮人ノ漂泊ヲキ、ナカラ タイメンイタサ
ヌハ 人事之道ニアタラヌ故 拙者居住ノ村ヨリ 二十里バカリヘダ、ツテ
ヲレトモ チヨトアヒタウヲモフテ ワザトキマシタ

ここで、伝語官居住の村とは、苗代川を指すものと判断される。江戸時代、薩摩領内に朝鮮人の漂着があった場合、苗代川の朝鮮通事が漂流民の事情聴取のために派遣されたのは、漂着船の第一漂着地ではなく、山川港・阿久根港などの廻航港であったという⁷⁾。史料に見る限り、薩摩領内漂着朝鮮船が最も多く移送された廻航港、すなわち、苗代川の朝鮮通事が最も多く派遣されたのは山川港であったこと⁸⁾、また、苗代川と山川との距離が大体20里ほどであることから推して、本書の対話の場面は、山川港ではないかと思う。

以上のことから、本書の対話の場面は、薩摩領内の漂着船の廻航港、おそらくは山川港あたりと考えられる。

次に、本書の登場人物について検討しよう。本書には、「伝語官（朝鮮通事）」と「朝鮮人漂流民」が登場するが、それぞれの素性等を示す以下のような表現が見られる。まず、伝語官については、本書中巻の次の部分から、対馬出身の者ではないことが知られる。

[3] [漂民/ア:中:60a:2]○義州의 큰 소나무가 이셔 그 솔가지에 수리매라 흰 새가 깃드려 잇단 말을 三十七八年前의 对馬州의 사던 사람의 증도 相对 호여 情談굿디 드룻드니 정말이옵나 알게 호소

義州ニ 大ヒ松ノ木ガアツテ ソノ松ノ枝ニ ビシヤト云フ鳥ガ巢ヲカケ
テヲルト云フ訳ヲ 三十七八年前ニ 对馬州出生ノ人ニ フトタイメンシテ
情談ノハシニ キ、マシタガ ジツジャウテゴザルカ シラサツシヤレイ

この部分は、伝語官自身は対馬に住んだ経験のない者であることを明確に示している。本書に登場する伝語官は苗代川の朝鮮通事と考えるのが穏当であろう。

次に、漂流民については、本書上巻および中巻の次の部分から、朝鮮全羅道

7) 徳永(1992)pp.25-26、徳永(1994)p.26を参照。

8) 徳永(1992)pp.25-26を参照。

出身者であることが知られる。

[4] [漂民/京:上:1b:1]●小人等은 朝鮮国全羅道順天 사던 漁夫읍는다
我トモハ朝鮮国全羅道順天出生ノ漁夫デコサリマスル処

[5] [漂民/京:上:7a:3]●우리들은 朝鮮国全羅道海南의 사던 百姓이읍는다
()朝鮮国全羅道海南出生ノ百姓テコサリマスル処ニ

[6] [漂民/ア:中:38a:5]●우리나라의도 봄곳지 잇단 말은 드룻스오되 이제까지 全羅道다히서 본 적이 업습는다 이 앞 慶尙道蔚山の 일 이셔 간 적 日本館 近処 지나가오매

ワガ国ニテ サクラバナノアルト申コトハ承ツテイマスレトモ コレマデ 全羅道ヘンニテ ミタコトハゴザリマセヌ処ガ コノ前 慶尙道蔚山ニヨウ ジアツテ ユキタミギリ 日本館近処ヲ スギユキマスル故

本書に登場する漂流民が朝鮮全羅道出身者という想定になっているのは、薩摩領内に漂着する朝鮮船は全羅道からのものが多かったこと⁹⁾、薩摩苗代川者の祖先の地が全羅道であったこと等の事情と関連しているのであろう。

以上述べてきたところのように、本書において想定されている対話の場面は（対馬ではなく）薩摩領内の漂着船の廻航港と考えられ、また、登場人物の伝語官は（対馬出身の者でなく）苗代川の朝鮮通事と考えられる次第であるが、このことから推して、本書の成立地は（対馬ではなく）薩摩苗代川であったと考えて、問題はないであろう。それでは、苗代川のいかなる者の手に成ったのであろうか？ 「漂民対話」苗代川自生説の立場をとる研究者らは、叙上のごとき本書の対話の場面の想定や登場人物など、薩摩苗代川の独自性を標榜した本書の内容（ストーリー）面を重視して、本書は、苗代川者自身によって編纂されたものであるとする。が、実は、この問題はそれほど簡単ではない。なぜならば、本書の内容を仔細に検討すると、苗代川独自のもの、苗代川において「自生」したものとは言えない部分も発見されるからである。次節において述べるところのように、本書には、明らかに対馬朝鮮語学の投影がみとめられる。そのような対馬朝鮮語学の影響が如何にしておよんだのか、すなわち、苗代川の者が対馬より将来した語学書を参照しつつ本書を編纂したためであるのか、それとも、何らかの対馬朝鮮通事の関与があった（例えば、薩摩に滞留し

9) 鶴園・他(1997)p.160の表6「朝鮮人漂流民の出航地と漂着地との対応関係」、池内(1998)p.83の表「薩摩領・朝鮮間における漂着事件」を参照。なお、対馬に漂着する朝鮮船は、慶尙道からのものが圧倒的に多い。

た対馬の朝鮮通事が本書を編纂した) ためであるのかについては、目下、断定することができない。

2.2. 所拠資料

本書には、対馬より苗代川にもたらされた朝鮮語学書類¹⁰⁾を引用・参照したと思われる部分が散見される。ここでは、対馬由来の朝鮮語学書のうち、「交隣須知」「惜陰談」「講話」「和韓問答」をとりあげ、それらを引用・参照した部分が本書に見られることを示そうと思う。

「交隣須知」

「漂民対話」の対訳日本語の中には、「交隣須知」に拠ったと思われるものがある。例えば、次の [7] [8] に見られるように、「漂民対話」では、朝鮮語「西北風」「벌기(尻、標準的な語形では불기)」に対して、それぞれ、「アナシカゼ」「イジキ」という特殊な日本語訳語が当てられているが、「交隣須知」の諸写本・刊本においても同様の訳語が当てられており、「漂民対話」の日本語訳語は「交隣須知」のそれを踏襲したものと見られる。

- [7] [漂民/京:上:8a:4] 西北風 アナシカゼ
[交/明14¹¹⁾:1:3a:5] 西北風 서북풍이 부니 アナジカ 吹ニヨリ
[交/アB4:1:3b:5] 西北風 서북풍이오매 ニジアナシテコサル故
[交/対:1:4a:5] 西北風 서북풍이 부니 アナジカ フェイテ
[交/京:1:2b:2] 西北風 서북풍이 부니 ニシアナジ風ガ 吹ニヨリ
[交/アC16:1:2b:3] 西北風 서북풍이 부니 西アナシ風ガ 吹クニヨリ
- [8] [漂民/京:上:21b:1] 벌기 イジキ
[交/明14:3:40b:3] 불기 キシキ
[交/ソ:3:59a:3] 불기 イシキ
[交/濟:3:59b:2] 불기 イジキ
[交/中:3:59b:2] 불기 イシキ

10) 苗代川におこなわれた朝鮮語学書類には、対馬よりもたらされたと考えられるものが数多くふくまれる。それら諸本の詳細については、安田(1966)、鄭光(1990a)(1990b)、李康民(1996)などを参照されたい。

11) 本論文において引用する「交隣須知」の諸写本・刊本は、次のように略す。

[写本] 京大本：交/京、アストン文庫本[C16]：交/アC16、アストン文庫本[B4]：交/アB4、
対馬本：交/対、ソウル大本：交/ソ、小田本：交/小、濟州本：交/濟、中村本：交/中

[刊本] 明治14年刊本：交/明14

このような日本語訳語の一致・類似の例はこの他にも多く発見されるが、ここには省略する。

「惜陰談」

この本は、京都大学文学部所蔵の新村出蒐集苗代川朝鮮語写本群に含まれるもので、巻2（内題「惜陰談 卷二」）の1冊（44丁）のみが残存する。図書番号は[Philology/2D/40.e]。朝鮮語の本文のみで対訳日本語はない。本文の内容は、日朝両国の通事が両国の風俗、制度等を比較しながら問答するもので、「漂民対話」の中巻の内容に類似している。序跋共になく、いつ、どこで、いかなる者によって編纂されたものなのか、明記したものがないが、対話の内容等から、もともと対馬において成ったものと見られる。対話の場面についても明確な地名などはあられないが、次の[9] [10]に見られるように、朝鮮側通事のせりふに「느려오-(下ってくる、つまりソウルから地方へ下京してくる)」という表現があらわれることなどから、釜山が対話の場面として想定されているものと考えられる。

[9] [惜陰談:20a:6]●12) 키옵신 말씀 하시 드룻스오며 나도 이번의 비로소
느려오니 事情은 아치 못키오되-

[おっしゃるおことば、とくと承りました。私もこの度はじめて下京しましたので、事情はわかりませんが-(引用者訳)]

[10] [惜陰談:22a:7]○我国船이 或 路文업서 貴国 左右道도 漂泊한 적은
漂船이 되고 서울서 書契도 오옵고 그 漂人等이 ㅅ로 待接之物이 잇습니

[わが国(日本)の船がもしも路文なく貴国(朝鮮)の左右道へ漂泊したときは漂着船(の扱い)になり、ソウルから書契も来ますし、その漂人等には特別にもてなしの品物があります。(引用者訳)]

●나도 이번 느려오기가 처음이오매 그 일은 生疎키오나 膳録을 상고키여
후일의 알게 키오리

[私もこの度下京するのが初めてですので、そのことは疎いのですが、膳録を参照して後日調べるようにいたしましょう。(引用者訳)]

12) 以下、「惜陰談」からの引用文中において、○は日本側通事のせりふ、●は朝鮮側通事のせりふであることを示す。

ところで、「漂民対話」には、この「惜陰談」を引用・参照したと思われる部分が散見される。以下に、その主なものを列挙しよう。

①釜山浦から対馬までの距離などの話

「漂民対話」の中巻には、釜山浦から対馬までの距離等に関する対話があるが、そのもとになったと思われる対話が「惜陰談」に出てくる。

[11] [惜陰談:30a:6]○釜山浦의셔 我国 佐須奈라 ㅎ고 待風 ㅁ음¹³⁾은 午方의 向ㅎ고 ㅅㅎ는 鰐浦는 巳午方의 当ㅎ음() 里数는 四百八拾里잇단 말이 前의셔 니르며 順風이 죠흔 날은 彼此山을 前後의 ㅅ년이 보고 건너갈 ㅅ에도 잇습니

[釜山浦からわが国(日本)の佐須奈という風待ちの村は午の方向であり、また鰐浦は巳午の方に当ります。里数は48里あるということは以前から申しており、順風の良い日は彼此の山を前後にはっきりと見ますし、渡ることもあります。(引用者訳)]

●니르시드시 日氣 곳 죠흐면 산은 ㅅ년이 ㅅ오되 아직 건너가는 일이 ㅅ스 오매 어드러 向ㅎ여 가음는지 ㅅ낫습더니 ㅅ슴으로써 着ㅅ이 아룅스오니 ㅅ치 아니케 ㅅ적어 두어리

[おっしゃるとおり、天気さえ良ければ山がはっきりと見えますが、まだ(対馬へ)渡ったことがございませんので、どちらへ向かって行くのやら知りませんでした。お話でもって着実にわかりました。忘れないように記しておきましょう。(引用者訳)]

[12] [漂民/ア:中:4b:3]○釜山浦의셔 対馬島 第一 갓가온 ㄸㅅ지는 大抵 水路 ㅅ트니쓰음 잇습는가 ㅅ셔 府中ㅅ지는 ㅅ트 ㅅ트리나 잇다 ㅎ음나

釜山浦ヨリ対馬島第一近ヒ処マデハ大抵水路何里ハカリゴザルカ ソレヨリゴ城下マデハ 又何里ホドアルト云ヒマスカ

●釜山浦의셔 対馬島 待風所가 ㅅ 제일 ㅅ가오니 그ㅅ지가 四百八拾里음고 ㅅ셔 府中ㅅ지 三百里남아 잇다 ㅎ음니

釜山浦ヨリ対馬島ワタシバガダイ一チカウゴザルカ ソレマデガ四十八里ゴザリマシ ソレヨリゴ城下マデ三十里アマリアルト申シマスル

○그 四百八拾里스이는 바다히 ㅅㅎ음나 ㅅㅎ음는가 ㅅ트 ㅅ히 ㅅㅣ나 잇습나 日氣 ㅅ흔 ㅅ는 ㅅ이나 ㅅ는 일이 잇습나요

ソノ四十八里ノ間ハ海上ヲダヤカニゴザルカ アラウゴザルカ 又 船ヲ

13) ㅁ음의誤記ならん。

ヨセル島デモゴザルカ 天氣ノヨヒ時ハ山ナドノミヘルコトゴザルカナ
●마장 陰翳 바다히옴고 드고나 四百八拾里 스이논 비 다힐 더는 커니와
下碇할 더도 업기의 不得不 一帆의 건너가지 아니면 못흔 곳이오매
벗음을 잘 보고 発船키옴너 새로이 各別 快晴흔 날은 彼我國이 서로 山은
잘 띄옴너

イタツテアラウミデゴザリマスル ナヲサラ四十八里ノ間ハ船ツケル所ハ
サテヲキ イカリ 入レル所モゴザラヌカラ セヒトモ一帆ニワタシユカズ
シテナラヌ所故 風勢ヲヨク見テ 出船イタシマスル 勿論各別快晴イタシ
タ日ハ カノ国ワガ国トモニ山ハヨクミヘマスル

釜山における日朝両国通事の対話を内容とする「惜陰談」に釜山浦から対馬までの距離等に関する対話があらわれるのは何の不思議もないが、薩摩領内における伝語官と漂流民の対話を内容とする「漂民対話」にかかる話題に関する対話があらわれるのはいかにも不自然である。さらに、対話の具体的な内容・やりとりを見ても、[11]の「惜陰談」は、対馬の事情に通じているのは日本側通事であり、朝鮮側通事は対馬へ行った経験がなくて不案内であるというごく自然な設定であるのに対し、[12]の「漂民対話」は、対馬に行ったこともない朝鮮人漂流民が(伝聞形を用いてではあるものの)対馬の地理や対馬までの海路についてすらすらと答えるといういささか不自然な対話内容となっている。「漂民対話」のこの部分の対話は、薩摩領内における現実対話に基づくものではなく、「惜陰談」をもとにしたものに違いない。「惜陰談」の日本側通事のせりふを朝鮮人漂流民のせりふに変え、さらに伝聞形を用いてつじつまを合わせたものと推測される。

このように、「漂民対話」に「惜陰談」に依拠したと思われる部分があらわれるという事実は、「漂民対話」の資料的性格を解明するうえで、重要な意味を持つと思われる。すなわち、本書の対話内容が、必ずしも薩摩領内における漂流民と伝語官の現実対話に根ざしているわけではなく、対馬由来の朝鮮語学書を適当に取捨選択・改変して成った仮想対話の部分も存在するというのである。

鶴園(1995)pp.110-111は、「漂民対話」中巻にあらわれる叙上の対馬事情等に関する対話部分に関連して、

「(前略)しかし、このようなテキストの作成に、必ず対馬の朝鮮通事の介在が必要なのであろうか。十七世紀から十八世紀に至る、長期間の薩摩の朝

鮮通事の活動によって、おのずと、いわば自主的にこのようなテキストが成立してきたと考えることは出来ないのであろうか。

確かに李康民が指摘するように、対馬が朝鮮の釜山に置いた倭館に関する対話があり、しかもそれは沈寿官本のみならず『別一』『別二』の破本部分に含まれるのであるが、ひるがえって考えるに、対馬の朝鮮通事が編集したものであるならば、「朝鮮의 対馬州館」であるとか、「対馬州館字」

「日本館近処」というような表現をするであろうか。百歩ゆずって対馬の訳官が漂流民の立場になってそのように表現したのだとしても、

私モ和館ノ家数ハ〔シラネ〕ドモ一昨年ヨリ館ニ毎日ユキ、餅ト飴アキナイスル子供ノハナシヲキキマスルニ、東館・西館ト申テ両所ニ家ガゴザリマシテ、西館ハ送使ガタゴシユクナサル長家バカリゴザリマス（『別一』八丁～九丁〔〕部分は虫損を朝鮮語より推測補填）

というような、対馬の通事であれば自明であろう知識を、ことさら書きとめる必要があったのであろうか。やはりこれらの情報は、すなおに漂流民から得た情報を書きとめ、それをそのままテキストにしたものとする方が自然であるように思える。」

と述べ、「漂民対話」中巻の当該部分はすなおに漂流民から得た情報を書きとめたものであろうとの見解を示している。また、鶴園・他(1997)p.181も、

「第二は、伝語官が対馬事情・日朝関係事情を伝聞として聞いていて、それを漂流民に確認しようとしている質問が多い（中略）ことである。このことは、「別一」が漂流民の漂着地は対馬以外、伝語官は対馬藩と無関係の者という設定になっていることを示している。また、この質問に漂流民が十分に答えられないこと（中略）も注意すべきで、対馬の事情に詳しい者がこのテキストを作ったという考えを否定し、漂流民と伝語官との対話メモに基づくという考えを支持したくなる要素である。」

と述べ、同様に、「漂民対話」の当該の対話部分は薩摩における漂流民と伝語官との実際の対話メモに基づいたものであろうとの見方を提示している。しかし、対馬に由来すると見られる朝鮮語学書「惜陰談」が「漂民対話」の当該部分の所拠資料になっている叙上の事実を照らしてみると、これらの見解はいずれも首肯しがたいものであると言わねばならない。

②船材に樅その他いろいろな木を用いる話

「漂民対話」の中巻および下巻には、日本と朝鮮の船材に用いる木材の相異に関する対話があるが、そのもとになったと思われる対話が「惜陰談」にある。

[13] [惜陰談:17a:3]○우리나라의셔는 비드리와 노 그밭과 든\히 흘디는
大概 加柴木을 쓰옵고 樅 樟 ㄹ든 나모도 ㅎ옵더니 貴国 비 노는 柞나모
소나모 쓰기가 만스오니 이는 아마도 든\치 아니올식

[わが国(日本)では舵と櫓、その他丈夫にすべきところは大概カシの木を用い、樅、樟のような木も用いますが、貴国(朝鮮)の船の櫓は柞や松の木を用いることが多いですが、これはおそらく丈夫ではないでしょう。(引用者訳)]

●果然 그러히의 日本 비는 비 연장이 다 든\히오되 我国 비는 松木만
가지고 못것스오되 大船은 드리 本木을 柞木을 쓰옵니

[まことにそのとおりでございます。日本の船は船の道具がみな丈夫ですが、わが国(朝鮮)の船は松の木ばかりでもって組んでありますが、大きい船は舵の本木に柞を用います。(引用者訳)]

[14] [惜陰談:17b:3]○我国 비 돛대는 檜나모와 楨나모 잇가나모 樅나모
붓치를 쓰옵더니 貴国은 아마도 그런 나모 붓치가 혼지 아닌가 시브의

[わが国(日本)の船の帆柱は檜と楨、杉、樅の木の類を用いますが、貴国(朝鮮)はおそらくそんな木の類は多くないでしょう。(引用者訳)]

●ㅎ옵신 말씀 그러히옵고 貴国은 나모도 여러가지 잇기에 비도 다
든\히오되 우리나라혼 죠흔 나모가 드므오니 마지 못히여 雜木을 쓰옵고
日本 비 든\히기는 果然 부러옵는이다.

[おっしゃるとおりです。貴国(日本)は木もいろいろあるので、船もみな丈夫ですが、わが国(朝鮮)は良い木がありませんので、しかたなく雑木を用います。日本の船の丈夫なことは、まことにうらやましゅうございます。(引用者訳)]

[15] [漂民/ア:中:33b:3]○草木은 日本것과 ㄹ습든고 다릅든고

草木ハ 日本ノト似テイマスカ チガウテイマスカ

●풀 類는 大同小異히오되 나모 類는 大相不同히옵니

草ノ類ハ ニヨツテイマスレトモ 木ノ類ハ 大ヒニチガウテイマスル

○나모 類는 朝鮮것과 日本거시 大端히 다르다 ㅎ옵는디 果然 朝鮮비를
본즉 원비는 커니와 연장인들 다 소나모만 쓰다가 다른 나모로 지은 거슨

못보오니 楠나모 槻나모 又튼 결 잇는 나모는 업습나

木ノ類ハ 朝鮮ノノト日本ノノハ大ヒニチガウト云ハシヤルガ マコトニ
朝鮮ノ船ヲミルニ 本ト船ハモトヨリ 道具トテモ 皆松ノ木バカリツカフ
テ ホカノ木デツクツタノハ 見マセヌガ 楠木 ケヤキゴトキ 柰ノアル
キハ ゴザランカ

●우리나라혼 솔나모와 찻나모 類만 만습고 다른 나모는 稀貴호울시 비도
거의 소나모를 쓰옵고 드고나 楠나모 槻나모 붓치는 보는 일도 업스운中
七八年前의 上京호는적 兩班宅의 갓습는디 저근 各具所里가 잇드니 고은
결 잇는 널로 지으려 잇습기를 그대 혼변 보왓습데이다 글로써 相考호여
보면 國中의 아조 업단 말을 못호오리

ワカ国ハ 松ノ木ト栢ノ木ルイバカリ多フゴザリマシテ 別ノ木ハマレニ
ゴザルユヘニ 船モ タブン松ノ木ヲ用ヒマスル ナヲモ 楠 케야키
타그히ハ 미타코토모고자리마세ヌ内 七八年前ニ上京イタシタミギリ
歴々ノ方ニ ユキシタ处 호소히箆箭가고자ತ್ತ아니 우츝키시히柰ノアル
板데츝꾸tte 고자리마신태라 쏘노時一度미신태고자리마시 아레ヲ
以테칸카헤테미레ハ 國中ニ 네카라나히ト申코트ハ申사레마스마히

[16] [漂民/ア:下:43a:1]●우리나라혼 楠나모 槻나모 又튼 결 잇는 나모類가
稀貴호오매 戰船이라도 거의 소나모옵고 或시 柞나모는 연장 中の 쓰는
일은 잇스오되 日本체로 문의 나모가 혼지 아닐 썩더로 木手들이 성녕도
잘 못호오매 안만 앓가히 너긴다 호여도 所謂 夸夫追日이란 말 쫓지 엇지
그쳐로 무을 手端이 되오리잇가

ワカ国ハ 楠木 케야키고토키 柰ノアル木ルイ가 마레니고자리마스故
軍船데모 타ブン松ノ木데고자리마시 모시ハ 유스노木ハ 道具ノ内ニ
ツカウ코트ハ고자리마스레토모 日本ノヨフニ 柰ノアル木가多フ카리마세
ヌ 노мина라즈 大工トモノサイクモアシウ고자리마스故 이카호드라시우
ヲ모히마신태테모 所謂 夸夫ノ日ヲ追フト申코트바노고트ク 드프신태
아노ヨフ니츝쿨시카타가ナルモノ데고자리마스카

「漂民對話」의 [15] [16]의 部分は、「惜陰談」의 [13] [14]에 攄ttたもの
と考えられる。

この「漂民對話」의 [16]의 部分について、出口(1996)p.129は、

「(前略) 日本船の船体にたいするこのような漂民の全面的ともとれる評
価は、本史料の性格が朝鮮通事の教科書というだけにはたしてどこまでかれ

らの意思どおりであったのか慎重に検証する必要がある。ただし、自船の建造工程にかかる記述などが丁寧に書き込まれているところを見ると、漂民の目に映った技術認識がこの文面にすくなくならず反映されているとみてさしつかえないだろう。

たとえば、漂民が日本船を目にした段階で、自船の技術の稚拙さを嘆き、その要因のひとつに自国は良材が恵まれていない点を指摘しているところに筆者は注目する。いかえると、『漂民対話』にみる日本船にたいする相対的な技術認識は、日本の木材の豊富さに裏づけられたところの造船技術の精緻さであった。漂民はたんに船体だけを比較していたわけではなく、その背景にある森の相違、風土の相違を船体技術に見いだしていたことになる。」

と述べ、「漂民対話」の漂流民のせりふにあらわれる自船認識、木材の相違についての認識は、現実の漂流民の認識を反映したものであるとの見方を提示している。しかし、上に示したとおり、この部分は「惜陰談」に由来するものであり、そこでの日朝両国通事のせりふに手を加え、漂流民のせりふに改変したものと考えられるから、この見解にしたがうことはできないと言わねばならない。

③くらの話

「漂民対話」中巻には、日本と朝鮮のくらの食べ方に関する対話があられるが、そのもとになったと思われる対話が「惜陰談」にある。

[17] [惜陰談:39b:2] ●海蠅은 맛시 무던히오되 我国의셔는 장만홀 法을 모로기의 우리나라 사름은 아조 먹을 묘리 업습니

[くらは味がよろしいが、わが国(朝鮮)ではこしらえる方法を知らないから、わが国(朝鮮)の人は全く食べることがありません。(引用者訳)]

○과연 그럴 드시 히옵고 모양은 근씩 >>한 거슬 엇던 方法으로 계씨지 장만홀지 모로오되 먹기는 실로 즐거(ママ) 먹습니이다

[まことにそのように存じます。形がぐにやぐにやしたものをどのような方法であそこまでこしらえたのかわかりませんが、食べることは実に好んで食べます。(引用者訳)]

[18] [漂民/ア:中:26b:4] ○海蠅은 엇지들 히여 먹습는가 젓돌아 늦고 먹는 法은 업습나

海月ハトラトモシテクヒマスカ シホヅケニシテヲキクウシカタハ

コサラヌカ

●海蠅은 우리나라흔 첫담아 낫고 먹을 법은 업습고 或 生으로 장만하여
먹는 일은 잇스오되 썩로 먹을 법은 모로옵니

クラゲハワガ国ハシホツケニシテヲキクフシカタハゴザリマセヌ 若シ
ナマデコシラエテ クフコトハゴザリマスレトモ 別ニクウシカタハ
ゾンジマセヌ

「漂民対話」の [18] の部分は、「惜陰談」の [17] の部分に拠ったものと考えられる。

④伝語官・通事が船のことをよく知らない話

「漂民対話」下巻には、伝語官が船のことをよく知らないという話があるが、類似したものが「惜陰談」にもある。

[19] [惜陰談:18a:7] ●아직 凡事의 未練을 썩더러 오히려 비일은
生疎을 옴기의 정 그러키외단 말슴은 即答치 못키옵니

[まだあらゆる事に不慣れであるのみならず、そのうえ船のことは疎うございますので、本当にそうであるということは即答できません。(引用者訳)]

[20] [漂民/ア:下:2a:4] ●果然 至當한 말슴이 올시 伝語官니가 비 일을
넉어시던가 보온고

マコトニゴ尤ノヲコトバデゴザリマスル 伝語官ガタガ船ノコトヲナレテ
ゴザルモノデゴザリマスカ

「漂民対話」の [20] の部分は、「惜陰談」の [19] の部分を参照・改変したものではないかと思う。

⑤専門用語の使い方

「漂民対話」には、「伝語官」「時任」など、役職等をあらわす専門用語があらわれるが、その使い方は、「惜陰談」のそれに一致する。

[21] [惜陰談:15b:6] 伝語官을 하여 請키엇스오며

[22] [惜陰談:22a:2] 그 때는 伝語官大庁의셔 公녀가 잇습더니

[23] [惜陰談:16a:4] 아직 절모셔 時任의도 □이치 아닌 前의 일ियो

[24] [漂民/ア:中:1a:2] 나도 伝語官이온디 今船(番)은 同官너 問情時任의

當き여 왓스오니

拙者モ 伝語宜テゴザル処 此度ハ 同役ナド 口伺ヒノ役且ニアタツテ
マイツタニヨリ

「漂民対話」における、これら専門用語の用い方は、「惜陰談」などの対馬由来の朝鮮語学書にならったものであろう。

その他、「漂民対話」の中巻([漂民/ア:中:24b:2])にあらわれる牛肉食に関する対話や、下巻([漂民/ア:下:33a:5])にあらわれるマキド(絞車、船具のひとつ)に関する対話などについても、そのもとになったと思われる対話が「惜陰談」にある([惜陰談:5a:3][惜陰談:18b:5]など)が、今は省略にしたがうこととする。

「講話」

この本は、現在、次の4つの写本が伝わることが知られている。1)と2)は薩摩苗代川におこなわれていたもの、3)と4)は明治初年の釜山の日本居留地で使用されていたものである。

- 1) 京都大学文学部所蔵本[Philology/2D/40.b]、上下2巻2冊、各冊とも「講話上(下)」と書かれた題箋が残っている。本文は上巻27丁、下巻25丁、上巻末に「主 朴伊円 道存」との朱筆の書き付けがある。朝鮮語を本文とし、その右側に片仮名漢字混じり文の対訳日本語が注記されている。新村出蒐集の苗代川朝鮮語写本のひとつ。(以下[講話/京])
- 2) 沈寿官家所蔵本、上下2巻、書写期不明。
- 3) 東京大学文学部小倉文庫所蔵本、明治7年(1874)中村庄次郎書写。
- 4) ロシア東方学研究所サンクトペテルブルグ支所アストン文庫所蔵本[No. C6]、*Dialogues in Korean*との題が付された革洋装本1冊。原本の和本をばらし、各丁ごとに洋紙各1枚をはさみ、洋装しなおしたもの。和本原本の巻頭題は「講話」にて、「講話」上下全2巻を内容とする。洋紙のページには、アストンの手になる鉛筆、ペン書きいれが見られる。丁数は、和本原本部分36丁(上巻14丁、下巻22丁)、洋紙部分42丁。本書は、アストンが外務省の宮本氏から譲り受けたもので、もともと釜山の日本居留地で朝鮮語教育に使用されていたものであったと考えられる¹⁴⁾。

14) 本書には、次のようなアストン自筆書きいれがあり、本書がもともと釜山の日本人朝鮮語通事の編纂にかかるものであることが知られる。

「W.G.Aston/ HM's Legatin, Yedo/ Japan 1878/ A present from Mr Miyamoto of the/ Jap. Foreign Office»[Dialogues in Korean/ Compiled by the Japanese College/

本文の内容は、4写本ともほとんど異なるところがなく、釜山における日朝両国官吏の交渉を対話形式で記述したものである。いずれの写本も序跋共になく、いかなる経緯によって編纂されたものなのか、明記したものがないが、対話の内容等から、もともと対馬において成ったものと見られる。対話の場面については、次の〔25〕〔26〕の用例に見られるように、「東萊」「釜山」という地名があらわれることなどから、釜山が想定されているものと考えられる。

〔25〕【講話/京:上:2b:5】上東萊 하시단 말 듯 좁고

東萊ニノボリナサレタト申コトヲ承リマシ

〔26〕【講話/京:下:13b:2】今日食前の 柴炭 事로 釜山 까지 대스 로이 나가 옴다 가

今日アサハンマエニ スミシバノコトテ 釜山 マテ ワサ 々々 テ 즈 마이
リ マシ テ

ところで、「漂民対話」には、この「講話」に見られるものと酷似した表現が随所にあられる。以下に、その主なものを列挙しよう。

①ゆるりとお話でも

〔27〕【講話/京:上:3b:5】종용히 말씀 이나 히 옴 새 이다

ユルリト ヲハナシデモ イタシマシヨフ

〔28〕【漂民/ア:中:4a:1】從容히 말씀 이나 히 고 저 히 옴 느 니

ユルリト ヲモノガタリデモ イタシタウゴザリマシタニ

②道も悪いところに

〔29〕【講話/京:上:10b:4】길도 險 한 터 예 까지 오 옵 시 니

道モアシイ処ニ コレマテライテナサレテ

〔30〕【漂民/ア:中:2b:3】길로 險 한 터 예 까지 나 오 시 니

of Interpreters at/ Fusankai/ Asano says these are written/ language. Notes by W. G. A. of no value.]

また、明治の初年に釜山の日本居留地における朝鮮語教育の教材として「講話」が使用されていたことについては、大曲(1936)p.152の次の報告により確認される。

「又朝鮮語の教授といつても交隣須知や隣語大方を骨子として之れに常談(人事篇・売買篇・古語篇に別たれ紙数僅かに十八枚、隣語大方の統篇の如きもの)と講話(日鮮官吏が交換する種々の挨拶の練習用として編輯せしもの紙数二十一枚)とを添えて、対話と訳述とを生徒に奨励し、又輪講輪読を行つた。」

路次モアシヒ処ニ コレマデライデナサレテ

③平安にごぎなされて

[31] [講話/京:上:12a:5]数日間 平安히 계시니 깃브와 ㅎ읍느이다

数日間平安コサナサレテ 珍重ニソンジマスル

[32] [漂民/ア:中:3b:5]밤스이 平安히시니 깃브와 ㅎ읍니

夜間ゴ平安ニゴザナサレテ 珍重ニソンジマスル

④以前会ったことなし

[33] [講話/京:上:13b:5]이전 뵈옵지 못히엿스오나

以前ヲ目ニカタツタコトハゴサリマセネトモ

[34] [漂民/ア:中:1a:1]以前 못보왔니

ハジメテアヒマシタ

⑤遠路雪を冒して

[35] [講話/京:上:15b:3]遠路의 冒雪히여

遠路 ユキヲヲカシテ

[36] [漂民/ア:中:2b:1]遠路의 冒雪히여

遠路 雪ヲヲカシテ

⑥船がついて命がたすかる

[37] [講話/京:下:23a:1]여흘 틈으로 비 다혀시니 人命은 保存히엿스오되

イワノハサマニ 船ガツキマシタニヨリ ジンメイハ タスカリ

マシタレトモ

[38] [漂民/ア:中:2a:2]此国の 비 다혔고 未殘히 먹숨을 保存히엿스오매

ヲ国ノ地ニ 船ガツキマシテ カスカナル命ヲ タシカリマシタ故

⑦かすかなる命

[39] [講話/京:下:23a:6]微殘히 먹숨을 扶支히을 썬 아니오라

カスカナル命ヲ トリツゝキマスルノミナリマセス

[40] [漂民/ア:中:2a:3]未殘히 먹숨을 保存히엿스오매

カスカナル命ヲ タシカリマシタ故

⑧申すに限りござらず

[41] [講話/京:下:24a:2]니랴 축냥 업스오니

申ニカギリハゴザリマセネトモ
[42] [漂民/ア:中:2b:2]니ㄴ 測量히 업고
申ニカギリゴザラス

「漂民対話」にあらわれるこれらの表現は、「講話」のそれを踏襲したものと考えられる。

「和韓問答」

沈寿官家に所蔵される苗代川朝鮮語写本のひとつ。1冊（24丁）、虫損甚だしく、紙辺として伝存する葉も少なくない。原表紙に「安政七年申三月廿九日」、「此主 朴寿悦」という注記を持つ。安政7年は1860年。くずし字で書かれた候文体の日本語本文の右側に対訳朝鮮語を配す。本文の内容は、日朝両国の通事が草梁倭館の位置、朝鮮の風俗、地理等について問答するもので、「漂民対話」の中巻の内容に類似している。序跋共になく、いつ、どこで、いかなる者によって編纂されたものなのか、明記したものがないが、対話の内容等から、もともと対馬において成ったものと見られる。本書中に、

[43] [和韓問答:13a:2]○¹⁵⁾朝鮮は夏にても氷が有により能く貯ふたものと交隣須知と申書冊に相見□□……

朝鮮은 녀름이라도 어름이 이시니 잘 간직하 거시다 ㅎ고 交隣須知라
하 □□의 비고 □는디

と、非増補本系「交隣須知」からの引用例が見えており、注目される。

ところで、「漂民対話」中巻には、白頭山に関する対話があらわれるが、そのもとになったと思われる対話が「和韓問答」に出てくる。

[43] [和韓問答:11b:4]○朝鮮北之境に白頭山と申高山有之よし 何道の内に
て 山の高さは大抵いかほとはかり有之哉 宜き人参出か様に承申候
北地に候はは随分寒気強く雪なども深く冬中[に]は定て山の絶頂は真白く相
成可候と相察し申候 何月比より雪の積何月比に解候哉 承度存候
朝鮮 北方之境의 白頭山 | 라 혼 노픈 삼 잇는가 시브드니 어논 道中の
이셔 되 노프기논 大抵 언마나 잇다 ㅎ읍논지 죠흔 人參이 난단 말이

15) 以下、「和館問答」からの引用文中において、○は日本側通事のせりふ、●は朝鮮側通事のせりふであることを示す。

드듯드니 北地오면 別로 寒氣 심하고 눈도 깊고 겨[울]중의[눈] 반드시
되 우희는 버려해여 잇습는 듯 斟酌호는□ 아모돌 쓰음의셔 눈이 싸혀
아모돌 쓰음의 녹습는지 듯고져 호□

●右白頭山は威鏡道の内にて則我国第一の高山にて山のたかさは凡二里余も
有之様に以前より申伝へ居候 尤宜き人参も出候 扱又寒氣の儀は丁度御明
察の通各別強く雪深かく察候 九月下旬より雪降十月より翌年春[ま]て雪山
□にて[三]四月に到り追々残雪解申候

그 白頭山은 威鏡道中の 이셔 곳 我国 第一 노픈 山이옵고 되 노프기는
大抵 二拾里남아 잇는 양의 以前부터 전즈말 잇습고 새로이 조흔 人参도
나옵고 쏘흔 寒氣 일은 맛지 明察호시는 대로 심이 집고 눈도 깊고
오히려 그월 念後 쓰음의셔 눈이 오고 十月부터 이듬히 봄까지 山은
버려해여 [三]四月의 나르려 漸々 눈이 녹습니

[44] [漂民/ア:中:55b:4]○白頭山은 人参이 나고 일흠난 深山이라 호드니
大抵 노프기는 언마나 잇다 호옵나 山 우희는 봄까지 눈이 녹치 아녓다
호오니 정말이옵나

白頭山ハ人参ガイデ 名ヲ云フ深山ト云マスニ 凡高サハイカホドアルト
云ヒマスカ 山イタノキハ春マデ雪ガキヘヌト云ヒマスガ マコトデゴザル
カ

●白頭山은 我国 第一 노픈 山이옵고 人参도 나옵는디 北地오매 락오
칩고 겨울의셔 이듬히 三四月까지는 눈이 녹지 아녓고 되 우희는
버려해여 잇습고 되 노프기는 大抵 二拾里남아 잇다 호옵니

白頭山ハ我国第一ノ高山デゴザリマシ 人参モデマスル処 北地故イカフ
サムフテ 冬ヨリ翌年三四月マデハ雪ガキヘマセズ 山ノ頂キハツラリト白
ンデイマシ 山ノ高サハ凡二里アマリアルト申マスル

「漂民対話」の[44]の部分は、「和韓問答」の[43]の部分を参照・改変したものと考えられる。

以上、述べてきたところのように、「漂民対話」は、必ずしも苗代川独自の要素ばかりではなく、対馬由来の朝鮮語学書類を引用・参照した部分も有している。「漂民対話」は、薩摩領内の朝鮮人漂着事件に取材しつつも、対馬由来の朝鮮語学書類を適当に取捨選択、換骨奪胎して、薩摩の実情に合うように改変したものと考えられる。

2.3. 成立時期

「漂民対話」の成立時期が1836年と推定されることについては、すでに、岸田(1997)pp.43-45において述べたところであるので、ここには繰り返さない。

3. 「漂民対話」の朝鮮語：日本語の干渉

前章において検討・確認した「漂民対話」の成立経緯を踏まえ、本章では、本書の朝鮮語の性格について検討を加えることとする。

本書の朝鮮語を仔細に検討すると、もともと朝鮮語として独自に成立していたとは考えられない部分が発見される。これらは、朝鮮語の母語話者である漂流民が話した文章をそのまま書き取ったのではなく、まず日本語が成立し、その日本語を翻訳する形で作り出されたものと見られる。次の用例を見られたい。

[45] [漂民/ア:下:19a:5] ●熟麻로 마들 줄은 童繩(농승)와 마로줄과…

亭デウツ綱ハ ミナハト シント…

○童繩(농승)이라 ㅎ기닌 用惣法(용종줄) 말이온가

童繩ト云フハ 用惣法ノコトデアルカ

●그라 ㅎ읍니 童繩(농승)도 ㅎ고 用惣法(용종줄)이라도 ㅎ읍고 ㅅㅎ
常時の 格軍들이 서로 니르기닌 用法(용줄)이라도 ㅎ읍고 모다 용줄
말이읍도시

サヨフデゴザリマス 童繩ト申 用惣法トモ申マシ サテ又 常ニ水夫ト
モノ タガイニ申マスルハ 用法トモ申マシ スベテ ミナハノコトテ
ゴサリマスル

この例は、「伝語官が漂流民の言った「童繩(농승)」ということばの意味がわからないので漂流民に質したところ、漂流民が返答した」という場面であるが、漂流民の返答するせりふが、日本語の方は自然な文になっているのに対し、朝鮮語の方はいささか不自然な文になっている。すなわち、この部分は、日朝両文ともに、

○AというのはBのことであるか？

●はい、Aとも言い、Bとも言います。また、Cとも言います。これらはすべて()のことです。

という構造になっているが、()の中には聞き手(伝語官)の既知情報が入らなければならない。日本語文は、聞き手(伝語官)が当然知っていると思われる日本語の「ミナハ」を入れ、自然な文になっている。しかるに、朝鮮語文は、聞き手(伝語官)が了解していないと思われる新情報のCに当る「용술」を入れ、文意が通じにくくなっている。本来ならば、聞き手(伝語官)の既知事項であるBに当る「用惣楚(용총술)」を入れるべきであろう。この部分の朝鮮語がこのようにぎこちない文となっているのは、それが、当初から朝鮮語として成立していたものではなく、先に日本語が成立し、その日本語を逐語的に翻訳する形で作られたものであるためと考えられる。

この他にも、本書には、朝鮮語母語話者の言語をそのまま書き取ったものとは考えられない朝鮮語、日本語母語話者によって作り出された「不自然な」朝鮮語、日本語の干渉をこうむった用法・文例と思われるものが随所にあらわれる。以下に、それらの一々につき、述べることにする。

音韻・表記

日本語にはない朝鮮語の音韻的対立を区別しえず、表記の混乱をきたした例が、多く見られる。

①ㅏとㅑの混同

日本語にはない音韻対立である母音ㅏとㅑの区別をなしえず、混同したものである。

[46] [漂民/ア:中:2a:3]먹슴 命 (*16)목슴)

後代に朝鮮語母語話者によって書き改められたと見られる[漂民/ア会話]においては、標準的な語形である「목슴」に訂正されている。

cf.[漂民/ア会話:中:2:1]목슴[命]

[47] [漂民/ア:下:2a:2]덕ㄴ이 トツクリト (*뚝뚝히)

[48] [漂民/ア:下:16a:5]樽저지도 ログイモ (*노술이도)

[49] [漂民/ア:下:2a:1]될썸더로 ナルノミナラズ (*-더러)

[50] [漂民/ア:下:9a:4]지오 주옵시되 ツクツテ下サリマシヨフズ (*지어 -)

[漂民/ア:下:10b:3; 13b:5; 15b:3; 16a:3など]にも、同様の「지오 주-ツクツテ下サリ- (*지어 -)」の例あり

[51] [漂民/ア:下:16a:4]민드러 주쇼셔 コシラヘテ下サリマセ (*민드러 -)

16) *印を付したものは、当該単語に対応する標準的な語形である。

② ㄷと一の混同

日本語にはない音韻対立である母音ㄷと一の区別をなしえず、混同したものである。

[52] [漂民/ア:下:31a:2; 34a:5]烟燻[연훈] 船タデ (*연훈)

[漂民/ア:下:30b:2]においては、標準的な語形である「연훈」に作る。

[53] [漂民/京:上:6a:5]구이지 말고 ツツマズ (*구이지 -)

[54] [漂民/ア:中:2a:4]莫極[막극] ㅎ읍고 カギリゴザリマセズ (*-극-)

[漂民/ア:中:2a:4]においては、標準的な語形である「-극-」に訂正されている。

cf.[漂民/ア:中:2:1]망극[罔極] ㅎ오

2 重母音中に含まれるㄷと一を混同したものも見られる。

[55] [漂民/ア:中:28b:4など]貴国[귀국] 貴国 (*귀국)

[56] [漂民/ア:中:25a:3; 34b:2]稀貴[희귀] 稀貴 (*희귀)

[57] [漂民/ア:中:48a:5]흰 털 白鬢 (*흰 -)

[漂民/ア:中:48a:5]においては、標準的な語形である「흰 -」に訂正されている。

cf.[漂民/ア:中:42:2]흰 털

③ 平音と激音と濃音の混同

日本語にはない音韻対立である平音と激音と濃音の区別をなしえず、混同したものである。

[58] [漂民/ア:中:8b:5]잔채 ㅎ시고 ゴ酒エンナサレ (*잔채-)

[59] [漂民/ア:下:8a:2]브믈젓키나 자여젓키나 折レタリサケタリ (*-겨나
-겨나)

[60] [漂民/ア:中:3a:5]낮춤 昼寝 (*낮춤)

[漂民/ア:中:3a:5]においては、標準的な語形である「-춤」に訂正されている。

cf.[漂民/ア:中:3:1]낮춤

[61] [漂民/ア:中:10b:1]가치고 持テ (*가치고)

[62] [漂民/ア:中:13a:1]가치고 가오매 持越マスル故 (*가치고 -)

[漂民/ア会話]においては、標準的な語形である「가즈-」に訂正されている。

cf.[漂民/ア会話:中:12:7]가져 가니

[63] [漂民/ア:下:5a:3]개개치 아닌가 너겨 스투하이타사난다카ト思ヒ
(*개개지 -)

[64] [漂民/ア:下:9a:2]브르치고 라레마시 (*-지-)

[65] [漂民/ア:下:19b:1]집피만 고와셔논 플라하かりウツテハ
(*- 쏘아셔논)

[66] [漂民/ア:中:19b:4; 19b:5など]궤 雉子; 키지 (*궤)

[漂民/ア会話]においては、標準的な語形である「궤」に訂正されている。

cf.[漂民/ア会話:中:18:3; 18:4など]궤

[67] [漂民/ア:中:53b:5; 54a:3など]環刀 썩고 帶劔シテ (*- 썩고)

[漂民/ア会話]においては、標準的な語形である「- 차-」に訂正されている。

cf.[漂民/ア会話:中:47:1; 47:2など]환도[帶刀]를 차-

④終声ㄷ, ㄹ, ㄴの混同

日本語にはない音韻対立である終声ㄷ, ㄹ, ㄴの区別をなしえず、混同したものである。

[68] [漂民/京:上:4b:3]던 내엿디니 타마시야 타시마시타니 (*달 -)

[69] [漂民/ア:中:7a:1; 7b:5; 8a:1]入送[입송] 入送 (*입송)

[70] [漂民/京:上:10b:5]状啓[쟝겨] 케이ブン (*쟝겨)

[71] [漂民/ア:中:12a:41]營纏[영정] 營纏 (*영전)

[72] [漂民/ア:中:40a:4]纏房[정방] 商人 (*塵房: 전방)

[73] [漂民/ア:中:31a:2]五分[오평] 五分 (*오평)

⑤ㅇ[ŋ]とㄱ[g]の混同

日本語にはない音韻対立であるㅇ[ŋ]とㄱ[g]の区別をなしえず、混同したものである。

[74] [漂民/ア:中:22a:51]허라기 虎ガ (*호랑이)

[漂民/ア会話]においては、○[ŋ]を持つ語形に訂正されている。

cf.[漂民/ア会話:中:20:7]호령이

文法

日本語にはない朝鮮語の文法的対立を区別しえず、用法の混乱をきたしたり、日本語の文法の干渉を受けた例が、多く見られる。

①～に：-의(*-의게)

日本語にはない与位格助詞の有生(-의게)：無生(-의)の対立を区別しえず、有生名詞にも-의を付したものである。

[75] [漂民/ア:中:9a:1]妓生들의 춤을 추이고

ケイセイトモニ ヲドリヲ ヲトラセテ

[76] [漂民/ア:中:50b:5]그놈들의 삭 주고

アノ者トモニ 賃錢ヲ クレテ

[77] [漂民/ア:下:1a:1]明日은 頭木手の 비 摘奸을 시기실 거시니

明日ハ 大工トウリヤウニ 船ケンブンヲ ヲセツケラリヨウニヨリ

[78] [漂民/ア:下:5b:1]木手の 시기시고

大工ニ ヲ申ツケナサレテ

[79] [漂民/ア:下:10a:1]劈鍊홀 사람의 仔細히 시겨 주시과져 ㅎ읍너

木ヲ サメル人ニ クハシウ云ヒツケテ下サレトフ ゴンジマスル

[80] [漂民/ア:下:11a:4]鋸匠의 켜이고 주마

木挽ニ ワカシテクリヨフ

②～から：-의셔(*-의게셔)

日本語にはない奪格助詞の有生(-의게셔)：無生(-의셔)の対立を区別しえず、有生名詞にも-의셔を付したものである。

[81] [漂民/京:上:27a:1]日本 땅의 漂泊한 사람의셔도 드랴 잇습기의

日本ノ地ニ漂泊イタシタ人ヨリ 承リイマスルカラ

[82] [漂民/ア:中:67a:1]北京의 가는 사람의셔 별셔 드랴습데

北京ニ ユキタ人ニ 敏ク キマシテゴザリマス

③～になる：-의 되다(*-가/이 되다)

動詞되- (なる) の前の名詞句には転成格助詞-가/이が付されるべきであ

るが、与位格助詞と見られる-의가付された例があらわれる。これらの例は、日本語の「～になる」という構文に干渉されたものと考えられる。

[83] [漂民/ア:中:7b:1]엇던 節次[절차]의 되옵는가

トヲシタ手数ニナリマスカ

[84] [漂民/ア:中:12b:1]또한 館中 사롭 日用[일용]의 되는 魚菜는 니리지
말고

サテ又 館中ノ人 日用ニナル魚菜ハ申ニヲヨハズ

[85] [漂民/ア:中:15a:2]밤의 되면 夜ニナ레바

[86] [漂民/ア:下:8a:4]넉당의 되오리 枚数ハ四枚ニナリマシヨフ

[87] [漂民/ア:下:11a:5]식장의 되고 三枚ニナ리

[88] [漂民/ア:下:16b:4]몇張[당]의 되는가 何枚ニナルカ

すでに指摘されているごとく17)、この現象は、「漂民対話」と同じく苗代川朝鮮語写本に属する「交隣須知」の京大本(苗代川本)においても観察することができる。のみならず、「交隣須知」のその他の諸本を観察してみると、苗代川に出自を持たない刊本・写本においても同様の現象があらわれることが確認される。このことから、この現象は、薩摩苗代川固有の現象ではなく、対馬にまでさかのぼるものと考えられよう。

[89] [交/京:1:7b:1]회간의 되여시니 下旬ニナリマシタニヨリ

[交/アC16:1:8b:2]회간의 되여시니 晦間[スヘ]ニナリマシタニヨリ

[90] [交/京:2:4b:6]닭의 입을 될지연정 니와트리ノ口ニナルトモ

[交/対:1:74a:3]닭의 입을 될지연정 니와트리ノ口トナルトモ

[交/明14:1:58a:4]닭의 임이 될찌연정 니와트리ノ口ニナルトモ

[91] [交/京:4:15b:5]닭의 입을 될지연정 鶏ノ口ニナルトモ

[交/アB4:4:24a:4]닭의 입을 될지연정 니와트리ノ口ニナルト云トテモ

[交/ソ:4:24a:4]닭의 입을 될지연정 니와트리ノ口ニナルトモ

[交/小:4:17b:6]닭의 입을 될지연정 鶏ノ口ニナルトモ

[92] [交/京:4:25b]몇 조각의 되엇는고 イクカケニナツタカ

[交/明14:4:27b:3]몇 쪼각에 되엇는가 イクカゲニナツタカ

[93] [交/対:1:37a:5]자녀는 늙의 스승의 불셔 되여시니

ソナタハ 人ノ師匠ニ トクナラレテ

17) 浜田敦(1966)p.53.

[交/アB4:1:37a:3]자네는 놈의 스승의 불셔 되여시니

ソナタハ ヒトノ師匠ニ トクナラレテ

[交/明14:1:30a:3]자네는 놈의 스승의 불셔 되여쓰니

ソナタハ 他ノ師匠ニ トクナラレマシタニヨリ

また、この現象は、「惜陰談」にもあらわれる。

[94] [惜陰談:36a:5]비록 피꼬리 씨오나 즈란 후는 杜鵑의 되을

거시매

[たとえウグイスがかえ孵しても、育った後はホトトギスになるのだから(引用者訳)]

ところで、これらの例における-의가、はたして上に述べたように与位格(～に)の助詞であるのかどうかについては、次のような異論を提起することもできる。

「漂民対話」には、이와의の表記に関して、一般に見られるものとは異なった表記があらわれることがある。次の例に見られるように、「곳(所)」という語は、「곳의」という特異な形であられるが、その末尾の-의は、その他の朝鮮語資料一般において、まれに名詞(主に子音終わりの名詞)の末尾に添加されることのある接辞-이と同一のものと見られる。この例は、이와의の表記を混同したものと見ることが可能である。

[95] [漂民/ア:中:13a:3]○그 朝市과 開市를 誹設히 읍는 곳의는 館中이 읍나
밖기 읍나

ソノ朝市ト開市ヲトリモフケラレル所ハ 館中デゴザルカ 外デゴザルカ

●開市誹設히시는 곳의는 館内예 大庁이 잇고

開市ヲ トリモフケナサルトコロハ 館内ニ 大庁ガアツテ

[漂民/ア会話]においては、「고지」という語形に訂正されている。

cf.[漂民/ア会話:中:13:1]○그 아춤져즈와 지시를 뵈이는 고지 관중이오
관밖기오

●개시는 관중 디청에서 뵈오고

[○その朝市と開市を開く所は館中ですか館外ですか。]

●開市は館中の大庁で開き(引用者訳)]

[96] [漂民/ア:中:67b:5]○和館 近处의셔 有名한 곳의는 무어시라 히 읍나

和館近処ニテ名高キ所ハ何ト云ヒマスガ

[漂民/ア会話]においては、「고지」という語形に訂正されている。

cf.[漂民/ア会話:中:54:7]○왜관 근처에 유명한 고지 있는지

[○倭館の近所に有名な所があるか(引用者訳)]

[97] [漂民/ア:中:68a:3]●釜山鎮 永嘉台라 흔 곳의가

釜山鎮永嘉台ト申所ガ

[98] [漂民/ア:中:4b:2]草梁이라 흔 곳의을시

草梁ト申所デゴザリマスル

[99] [漂民/ア:下:13b:2]통문은 빅드리 드릴 곳의을도시

通門ハ カジヲ入レルトコロデ ゴザリマスル

このように、本書においてイとウの表記の混同の現象が観察されることを勘案すれば、先に挙げた [83] ~ [88] の例文のうちのあるもの、特に-이が子音終わりの名詞に後続した場合の [84] ~ [88] については、-이を与位格助詞とは見ずに、転成格助詞（あるいは名詞末尾に添加される接辞）の-이の異表記と見ることも可能であろう。

しかしながら、[83] の例のように、一般に-이が付きにくい母音終わりの名詞にも-이が後続する場合があること、さらに、[92] の例に見られるように、「交隣須知」の明治14年刊本には-이ではなく-에と表記した例もあらわれること等を考慮すれば、やはり-이は与位格の助詞と見るのが穏当と思われる。

[92] [交/明14:4:27b:3]몇 또각에 되엇는가 イクカゲニナツタカ

④~に会う：-이 만나다(*-를/을 만나다)

動詞만나다（会う）の前の名詞句には対格助詞-를/을が付されるべきであるが、与位格助詞の-이が付された例があらわれる。この例は、日本語の「~に会う」という構文に干渉されたものと考えられる。

[100] [漂民/ア:中:46a:4]他国 사람의 만나 뵈오리잇가

他国ノ人ニ マミヘルコトガ ナリマシヤウカ

[101] [漂民/ア:中:61a:1]商賈의 만나 보고 商人ニアフテ

[102] [漂民/ア:中:62b:2]그 새 키는 양을 보든 사람의 만나

ソノ鳥ノシワザヲミタ人ニアウテ

この現象は、「交隣須知」京大本においても観察される。

[103] [交/京:2:45b:4]좌우로서 오는 사람의 다 만나오리
左右カラクル人三 ミナ アイマシヨフ

⑤見物に行く/来る：구경의 가다/오다(*구경을 가다/오다)

移動動詞가다(行く)、오다(来る)などの前に、移動の目的をあらわす名詞句がくる場合、その名詞句には対格助詞-를/을が付されるべきであるが、与位格助詞の-의が付されたものである。この例は、日本語の「見物に行く/来る」という構文に干渉されたものと考えられる。

[104] [漂民/ア:中:68a:1]求景의 가옵는 일은 업습나
見物ニユカシヤレタコトハ ゴザランカ

[漂民/ア会話]においては、「구경히-」に訂正されている。

cf.[漂民/ア会話:中:54:8]구경히 일이 잇소

[見物したことはありますか。(引用者訳)]

[105] [漂民/ア:中:45b:4]漂流中の 날마다 求景의 오는 사람은 不知其数온더
漂流中ニ日々見物ニキタ人ハ ラビタダシウアツタヌガ

[漂民/ア会話]においては、「구경히러 오-」に訂正されている。

cf.[漂民/ア会話:中:39:2]초풍히엿슬 씨예 구경히러 오는 사람이 날마다
부지기슈로되

[漂流したときに見物しに来る人が毎日おびたしいのですが(引用者訳)]

「交隣須知」においては、このように与位格-의を用いる現象は確認できない。

[106] [交/京:2:37a:5]구경히라 오옵소 켄브쯔니 코살레

⑥~してくれる -고 주다(*-아/어/여 주다)

日本語にはない接続語尾の文法的対立である-고と-아/어/여の区別をなしえず、混同したものである。

[107] [漂民/京:上:31a:3]시늌대 二三介 버히고 주옵쇼
女竹二三本キラセテ下サレマセ

[108] [漂民/京:上:34b:2]낫>치 적어내면 한 잇틀 스이에 출이고 주오되
一々書出シタラバ 一兩日ノ内ニ ソロヘサセテクレフカナレトモ

[109] [漂民/ア:下:18a:2]바론 거슬 버히고 주소서
스그이노ヲ キラ세테下サリマセ

[110] [漂民/ア:下:27b:1]請히는 대로 켜이고 주소서
ネガイドフリニ ワカ세テ下サリマセ

[111] [漂民/ア:下:30a:1]잇가나모 여섯介 버히고 주소서
杉木六本 キラ세테下サリマセ

この現象は、「交隣須知」には確認できないが、「惜陰談」にはあらわれる。

[112] [惜陰談:36a:3]◎蜀魄鳥는 제 나흔 알을 씨오지 못하여 괴소리가
씨오고 준다 히오니 울스오니잇가

[ホトトギスは自分の生んだ卵を孵すことができなくて、ウグイスが孵して
やると言いますが、本当でございましょうか。(引用者訳)]

語彙

語彙の使用においても、日本語の干渉を受けたと思われるものがある。

①練る：고다(*반죽하다)

「漂民対話」中巻には、次のような「菓菓[약과]」の作り方についての問答
があらわれる。

[113] [漂民/ア:中:39a:1]◎朝鮮菓子中の 菓菓란 거시 第一 마시 쫄다 히니
엇지들 민든 거시읍나요

朝鮮菓子中内ニ 菓菓ト云フ品ガ第一アジハヒガヨヒト云フガ ドラドモ
コシラヘタモノデ ゴザルカナ

●菓菓민들 法은 손시 히는 일은 업습거니와 밀굴을 조흔 燒酎과 쌀로
석어 고아서 大抵 일촌남아 네모히예 버히다가 츄기름의 지저 그를
향아리의 녀허 쌀의 담아두고 数十日이 지낸 후 먹는 거시라 히읍니

菓菓コシラヘカタハ テニカケタコトハゴザリマセネトモ 小麦ノ粉ヲ
ヨロシヒ燒酎ト蜜デ ネリマゼテ 凡一寸アマリ四角ニキツテ アケデ
ソレヲツボニ入レ 蜜にツケヲヒテ 数十日スギデカラ タベルモノト
申シマスル

ところで、このくだりの漂流民のせりふにおいて、日本語「ネリ」に対応する朝鮮語が「고아서」となっているのが奇怪である。「고다」という語は、「煮込む、煮出す、煮詰める」などの意で用いられる加熱動詞であるから、この文脈における「(小麦粉を)練る、こねる」の意味には当らない。小麦粉を油で揚げるまえに「煮込んで」しまったら、菓菓にならずに糊になってしまう。ここでは、「고다(煮込む)」ではなく「반죽하다(練る、こねる)」等の語を用いるべきであろう。[漂民/ア会話]の当該部分を見てみると、正しく「반죽하여(練って、こねて)」に訂正されていることを確認することができる。

[114] [漂民/ア会話:中:33:2]○조선 과자중에 약과가 제일이라 하니 약과는 엇더케 만드는 거시오

●약과를 손쉬우히지는 아니하되 슈슈히는 말을 드르니 밀가루와 조흔 술과 꿀을 섞어 반죽하여 네모지게 베여 참기름에 지진다 하오

【○朝鮮の菓子の中で菓菓が一番であると言いますが、菓菓はどのように作るものですか。

●菓菓を自分で作りはいたしません、料理をする人の言うことを聞くと、小麦粉と良い酒と蜜をまぜてこねて四角に切つてごま油で揚げるそうです。(引用者訳)】

それでは、何ゆえ、「漂民対話」の朝鮮語は、日本語「ネリ」に対応する部分が「고아서」となっているのか。この問題については、次のような解釈が可能であろう。

この場合の朝鮮語「고다」は、日本語「ねる」の持つ意味に、直接的あるいは間接的に、干渉された用法を呈していると考えられる。

「ねる」という語は、現在一般に用いられる「(熱を加えずに)こねる」という意味の他に、「糸をねる」「金^{かね}をねる」といった用例に見られるごとく、「(熱を加えて)精製する、粘らせる」という意味で用いられる場合がある。『時代別国語大辞典 室町時代編』は、この意味・用法について、次のように記述する(下線は引用者)。

[115] [時代別]ねる[練る・鍊る・粘る]㊦(他動四)適切なただてをほどこして、素材のもつ粘性を引き出し、そのものが望ましい性能や強度を持ったものになるようにする。(中略)

「Neri, u, etta.(ネリ、ル、ツタ)。柔らかい捏粉などのような或る物を、火

で、濃くする、すなわち、濃厚にする。「糸ヲネル」。絹糸を煮る。「金ヲネリ鍛ウ」。鉄、金属などを、よく打ち、火の中で白熱させる」(日葡)
 ①絹の糸や布を灰汁で煮て、柔らかくしなやかなものにする。(中略)
 ②溶いた粉や土、また糊などを、粘り気が出るまで、かきまぜるようにしてこねる。また、そうして望ましい粘り気の出た状態にまでする。(後略)

このような加熱を伴う場合の「ねる」の意味は、朝鮮語「고다(煮込む)」の意味に重なるものである。「交隣須知」における朝鮮語「고다」に対する和訳を観察すると、「煎じる」という語に加えて、「ねる」という語も当てられていることを確認することができる。

[116] [交/京:2:27a:5]牛毛 우모는 고와 먹습니

トコロテンクサハ センシテ クイマスル

[交/ソ:2:27a:5]牛毛 우모는 고아 먹느니라

トコロテンハ センジテ クウ

[交/小:2:27a:5]牛毛 우모는 고아 먹느니라

トコロテンハ センジテ クウ

[交/明14:2:20a:4]牛毛 우모는 고아 먹습네

トコロテンハ netzテ クヒマス

[117] [交/京:3:55a:2]爛 무르게 고아 두고 자셔 보옵소

タヽルヽヨウニ netzテヲイテ アガツテミサシヤレイ

[交/ソ:2:59a:2]爛 무르게 고아 두고 자셔 보옵소

ヤワラカニ netzテヲイテ アガツテゴロウジイ

[交/小:2:59a:2]爛 무르게 고아 두고 자셔 보옵소

ヤワラ카ニ netzテヲイテ 아카ツテ코로ウジ이

[交/明14:2:42b:5]爛 무르게 고아 두고 자셔 보옵소

야하라카니 netzテオ이テ 아가ツテゴ로우지마세

[118] [交/京:3:46b:4]飴 옛을 돌게 고와 먹자

아메ヲ 아마이요우니 netzテ 크라우

[交/小:3:85b:2]飴 옛을 고아 먹자

아메ヲ netzテ 크라우

[交/明14:3:59a:3]飴 옛을 고아 먹자

아메ヲ netzテ 크하우

したがって、日本語の「ねる」と朝鮮語の「고다」「반죽하다」のそれぞれの意味は次のような対応をなしていると言える。

ねる	고다 (熱を加えてこねる、粘らせる)
	반죽하다 (熱を加えずにこねる)

「漂民対話」の朝鮮語において、「고다」を、本来「반죽하다」を用いるべきところにも用いているのは、日本語「ねる」の意味・用法に干渉された結果であると考えられる。

以上は、朝鮮語「고다」が、日本語「ねる」の意味・用法に、直接的に、干渉されたと考えるものであるが、さらに、別のルートから干渉を受けたと考えることもできる。つまり、日本語にはない音韻的対立である朝鮮語の平音と濃音の区別をよくしえず、「고다(煮込む)」と「꼬다<꼬다(縄をなう、よる、ねじる)」とを混同したと見る見方である。「漂民対話」には、「꼬다<꼬다(縄をなう)」が平音の「고다」という形であらわれた次のような例がある。

[119] [漂民/ア:下:18b:2]맞돈 대로 고와 쓰오되

アフヨフニ ナウテ ツカヲゝズ

[120] [漂民/ア:下:19a:1]고와 보오리

ナウテ ミマシヨフ

[121] [漂民/ア:下:19b:1]도돌기도 집피만 고와셔노 支撐키 어려오니

クリヲロシモ ワラバカリ □ツテハ モテマネマスルニヨリ

さらに、「交隣須知」の京大本には、「꼬다<꼬다(縄をなう)」に対して「ねる」という和訳を当てた例が見られる。

[122] [交/京:2:35a:1]樞 ㅅ리는 목품이 결 도흐니라 광대ㅅ리는 줄을 꼬와 쓰느니라

ハキハ モクヒンガ モクガヨシ ノハギハ ツナヲ ネツテ
ツカイマスル

[交/ソ:2:38a:1]樞 ㅅ리는 목품이 결 도화 ㅅ리가 도흐니라 又
광대ㅅ리는 줄을 고와느니라

ハギハ 木ノヒンガ モクモヨウテ サケヨウ ゴザル ヤマハギハ

ツナヲ ウツ

[交/小:2:38a:1] 柁 스리는 목품이 결 도화 반이가 도호니라 又
광대반리는 줄을 고왓느니라

ハギハ 木ノヒンガ モクモヨウテ サケコウ ゴザル ヤマハギハ
ツナヲ ウツ

ここに「ねる」→「繩をなう」→「꼬다<꼬다」→「고다」という奇妙な連鎖が成り立つが、このような連鎖にしたがって、朝鮮語「고다」が日本語「ねる」の意味・用法の干渉を受けたと考えることも可能であろう。

以上、本章においては、「漂民対話」の朝鮮語に日本語の干渉を受けた不自然な用法が随所にあられることを述べてきた。これは、本書の朝鮮語が、朝鮮語母語話者の言語をそのまま書き取ったものではなく、まず、日本語が先にありそれを翻訳する形で成立した部分、日本語母語話者によって作り出された部分を多く有していることを物語っている。

4. 結

以上、本論文においては、「漂民対話」の朝鮮語の性格につき、特に、その成立経緯、対訳日本語との関係および日本語の干渉の観点から考察してきた。論じた内容を要約すれば、以下のとおりである。

まず、本書の成立にかかわる諸問題を点検し、本書は、薩摩領内(おそらく山川港あたり)における苗代川の伝語官と朝鮮全羅道出身の漂流民との対話を内容としたものとみなされうるが、そのような対話の想定とはうらはらに、当地での伝語官と漂流民との現実の対話に基づくのではなく、対馬由来の朝鮮語学書類(「交隣須知」「惜陰談」「講話」「和韓問答」)を参照して改変した仮想対話と見られる部分があることを指摘した。さらに、本書の朝鮮語および対訳日本語に対して検討を加え、本書の朝鮮語には、当初から朝鮮語として成立したのではなく、日本語に対応すべく作られた(すなわち、朝鮮語母語話者である漂流民の言語をそのまま書き取ったのではなく、対訳日本語を翻訳した)と思われる部分が見られること、日本語母語話者によって作り出された「不自然な」朝鮮語、日本語の干渉をこうむった用法・文例と思われるものが多く発見されることを明らかにした。

「漂民対話」の対話の内容を歴史的事実に基づいたものと見る苗代川自生説は、今後、再考をせまられるものと思われる。

参考文献

- 池内敏 (1998) 『近世日本と朝鮮漂流民』 京都：臨川書院.
- 大曲美太郎 (1936) 「釜山港日本居留地に於ける朝鮮語教育 附朝鮮語学書の概評」 『青丘学叢』 24, 146-163.
- 岸田文隆 (1997) 「『漂民対話』のアストン文庫本について」 『朝鮮学報』 164, 33-53.
- _____ (1998a) 「W. G. Aston 旧蔵 江戸期・明治初期 朝鮮語学書写本類에 대하여」 『제5차 조선학 국제학술토론회 논문집』 Vol. 2(歴史), 101-124. 大阪/北京：国際高麗学会.
- _____ (1998b) 「アストン旧蔵の『交隣須知』関係資料について」 『朝鮮学報』 167, 1-39.
- _____ (2000) 「アストン旧蔵江戸期・明治初期朝鮮語学書写本類調査報告」 『青丘学術論集』 17, 141-167. 東京：韓国文化研究振興財団.
- 鶴園裕 (1995) 「沈寿官家本『漂民対話』について」 『朝鮮学報』 156, 97-128.
- 鶴園裕・池内敏・古畑徹・南相璽・小見山春生 (1997) 「江戸時代における日朝漂流民送還をめぐって - 『漂民対話』を中心に -」 『青丘学術論集』 11, 126-218. 東京：韓国文化研究振興財団.
- 出口晶子 (1996) 「韓国の在来型構造船 - 隣接アジアとの比較から -」 『青丘学術論集』 9, 99-142. 東京：韓国文化研究振興財団.
- 徳永和喜 (1992) 「薩摩藩の朝鮮通事について (一)」 『青山史学』 13, 23-31.
- _____ (1994) 「薩摩藩の朝鮮通事寸考」 『歴史手帳』 22/4, 25-31.
- _____ (2001) 「薩摩藩の朝鮮通事 - 『漂流・漂着』と薩摩藩の対応 -」 『第14回韓日・日韓合同学術会議記録 - 世界の中の東アジア文化 III -』, 63-92. 東京：財団法人日韓文化交流基金.
- 浜田敦 (1966) 「薩摩苗代川に伝えられた交隣須知について」 京都大学文学部 国語国文学研究室編『交隣須知』解題, 21-55. 京都：京都大学国文学会.
- 室町時代語辞典編修委員会 (1985-2001) 『時代別国語大辞典 室町時代編』 I-V. 東京：三省堂.
- 安田章 (1966) 「苗代川の朝鮮語写本類について - 朝鮮資料との関連を中心に -」 『朝鮮学報』 39/40, 210-237.

- 김영신 (1981) 「『표민대화(漂民對話)』 연구」 부산국어교육학회편 『죽헌
이주호 교수 회갑 기념 논문집』, 15-53. 대화출판사.
- 유동석 (1998) 「『표민대화(漂民對話)』 연구」 『韓國民族文化』 11, 241-
277. 부산 : 釜山대학교韓民族文化研究所.
- 李康民 (1990) 「薩摩苗代川に伝わる『漂民對話』について」 『国語国文』
59-9, 1-26.
- _____ (1996) 「朝鮮資料의 一系譜 - 苗代川本の 背景 -」 『日本学報』
36, 89-114. 서울 : 韓國日本学会.
- 鄭光 (1990a) 「壬辰倭乱 被拉人들의 국어학습자료 - 京都大学 소장 苗代川
朝鮮語 資料를 중심으로 -」 基谷姜信沆先生華甲紀念論文集刊行委員會
編 『国語学論文集: 姜信沆教授回甲紀念』, 187-208. 서울 : 太学社.
- _____ (1990b) 『薩摩苗代川伝来の朝鮮歌謡』 京都 : 中村印刷.

「표민대화」의 한국어 -그 허구적 측면-

기시다 후미타카(岸田文隆)

요약

사쓰마 나에시로가와(薩摩 苗代川)의 한국어학습서 「표민대화(漂民對話)」에 대한 연구는 최근 어학적인 측면에서뿐만 아니라 역사학(근세 민중사)적인 입장에서든 활발한 접근이 이루어지고 있다. 이러한 역사학적인 입장의 연구들에는 「표민대화」를 「역사자료」로서 취급하려고 하는 경향, 다시 말하면 「표민대화」의 내용이 어떤 역사적 사실을 기록하거나 반영했다고 보는 경향을 띤 것들이 많다. 그러한 경향을 보이는 가장 뚜렷한 예가 「표민대화」 나에시로가와 자생설이다. 이 견해에 따르면 「표민대화」는 사쓰마 영내에 표착한 실제 한국인 표류민에게서 직접 얻은 정보를 기록하고 그것을 그대로 텍스트로 만든 것으로서, 사쓰마 나에시로가와에서 자생적으로 성립된 것이라고 한다.

그러나, 「표민대화」에 나타난 표류민과 전어관(伝語官, 일본측 통역관)의 대화 내용을 자세히 관찰해 보면, (중전에는 현실대화를 반영한 것으로 생각되어 오던 것들 중에도) 현실 대화로서는 부자연스러운 부분, 심지어는 의미가 통하지 않는 부분도 산견된다. 「표민대화」의 자료적 성격을 올바르게 평가하기 위해서는 이 책의 허구적인 측면에 대한 구명도 이루어져야 한다. 이 논문은 이러한 입장에서,

① 먼저 이 책의 성립에 관한 몇 가지 문제들을 다시 한번 점검하고, 이 책은 사쓰마 영내에 표착한 표류민에게서 직접 얻은 정보에만 의거해서 성립된 것이 아니라 대마도(對馬島)에 연유한 한국어학서류(「교린수지(交隣須知)」 「석음담(惜陰談)」 「강화(講話)」 「화한문답(和韓問答)」)를 인용·참조한 흔적이 보이는 것이라는 사실을 지적했다.

② 다음으로 이 책의 한국어와 대역일본어를 검토하고, 이 책의 한국어에는, 한국어 모어화자인 표류민의 언어를 그대로 기록한 것이 아니라, 대역일본어를 번역한 것으로 판단되는 부분이 나타난다는 사실, 그리고 일본어 모어화자에 의해서 만들어진 「부자연스러운」 한국어나, 일본어의 간섭을 받았다고 생각되는 용법이 많이 발견된다는 사실을 밝혔다.